俳諧一葉集

後編

二

1 4
3157
30(8)

14
3157
30
(8)

早稲田大学

俳諧一葉集遺稿之部

古学庵佛兮 編
幻窓湖中
坎窩久臧 校

一格に入て格を出るはなを狭く又格に入るはなを狭くして自在を得るも向上の一路なれば四海を兄とすべし

一手業不易一対海内

一代門の句八彩色のごとく赤門の句八墨絵のごとくすべし

しかれども彩色のあるはなを代門にかくしてさびを墨絵のごとくすべし

一名人は世をよく観じ知りおるゆえ愛憎を
上まわぬ法なれば所々おもしろかり
一蕉翁俳諧半生一生の味
一古書撰集よりのれることさすがに
一系門の俳諧を学ぶ者それ先翁のゆゑしの青の
日暮みのひさこ山の形美信濃越後より出羽代し
を考へ
一初四のうちは自然をもとむ
山をこえて向の梅へやらるる
ものは三尺を空むさ
ん心早き時は古人の胸中を知
一俳諧は中人以下はものとなるは俗語平語
俗語平語をもちゐる俳諧は拙なしとはいふ
ゆゑは俗まじきすし俳諧は美紫集のごとし
とかく味はひ深し唐明すべて中華の豪傑
ものは心のいやしきを恥とす
一まことを人事あし素朴なるは本一の
一まと廉直なるべし自の姿は貴物の小屋
ゆゑにくみて初て激風
寒中花をふうん去女の月を
ゆゑにくゆゑにくゆゑ
古の深く祖翁口決と
一歳人翁ゆいひくるは半俗八字紙の詩をわひやるわれ
はひいつちを拙とまるめ俗にいひ御いつれのなら花の
命し

菊ゐしをみのひて枝をあらはす人ハさとり異先ハ御ハ若樂を
聖とよりとハそれて全のうつくしを六月百て酒おるを憂るに
和尚の御引かへうつゆくと有てをのをのれ於く
はたらを見ゆてくて泥をうつく枝をかる實良ハつのれ
てゆく〳〵とゆふに赤ハ全を面けと又枝ゆ
きをゆく況や蝶掃こをやをれ成ハ眼をこうをををして
情ゆををあう旅ハ保生の書つをかを自生てけきをて
受ゆれ一をを大和ゆをけ入をおを物ををつふれあを
をつけをををををしゆのをををんをををを村
野森をいをを妙ハいををををををををををを似を
をのををゆをゆひをををむかをの法を義義のおををを
をををををを

梅ハ花の
ひをを白はををのをる赤ををををををををををのけ
枝の梅花をいをん
一秋のけの見ををいやをををて後をあを屋ハ初をを
秋ハををををををおをを後をのくをけををの言
方を浴ををゆををあをの和歌梅の枝ををををををを
中ををを言をを後を梅の白梅をやくをけををの入
梅をを人の和れハ生性の花白をををををを花白のけき
をををを梅合はをのををゆををを
いれををや開の方ゆくを位の梅
山里を梅花白をおをを梅花
梅をを花はをおをを代白を元二義を梅

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　今年貞享の古式を改め[illegible]

[illegible]

文甚月の花の生を定るもの也

投入ヶ源

一　月花　一句
一　出合　書道
一　短冊　扶考
一　書畫　床掛

一諸礼　俳止

芭蕉庵桃青判

一諸礼俳止

一出合を近但寄先

一一句一直　宝月花一句

右三ヶ條堅可被申也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一一宿ゟ宿ゟ宿ゟ宿ゟ再宿すべし杖い石上不限とも

ゆくべしゆくべし却ゆくと思べし

一物すき後ゟ後ゟ後ゟ後ゟ跡ゟ物の命をとゝまるべし

一君父の難ゆるゆるゟ門ゟゟ迷ゟ何ゟ天をいなゝゟゟる

思ひゟゟ情ゆるれハし

一宿銭迄財を過すべしゟゟゟゟゟゟ思ゟゟゟゟゟ

程ゆるべし

一魚ゟ獣の肉を喰ゟ時ゟ時ゟ時ゟ時ゟ美食珍味ゟ中ゟ

俗者ゟゟれ無ものし茶根を咬ゟ百事をあるべし

一人のゟゟ先ゟゟ己ゟ句をもゟゟゟ空ゟ背ゟゟ無ゟ

ゟゟゟゟ説ハ従ゟ中ゟ聞ゟ者ゟゟハゟゟ

一ゟゟゟ喰迄の境ゟゟゟゟ所無の命をおこゟゟゟ者ゟハ

中無ゟゟゟ

一ゟ句ゟ義ゟ者ゟゟゟれ一枝の枯枝をゟ己ゟ疲御ゟゟ

一母て酒を飲へうれ郷農庭ものを周絆しかくくの微醺
みて止て知すおうとれとれ楽るく祀案の戒ものを聽を
周すの破をみく先ハし酒を さうの例を性をへなるし
一船務業代をうるくくふく
一他の程を斧をもう長を家をて多のれ人を謝をものを
酒をうもし甚いや
一俳諧のお教伝すくふく教話もれハ虚誠くて芳を善へ
一女姓の俳友をてしもくふく師をて弟子をしいるぬをとのう
吐をを歌会を八人をもし他の一て地の男女の色ハ闘ををる
石をもう流落すれハ心数一をうれ吐道ハ主一弟道をて
をう能おのれを有くし
一主語う物八一枝一草をくくを山川江ほををなう

住をめるや
一山川四位をくく易入て一新くて秋の色を付るもおれ
一一字の師恩くくくををるもの一百の理ををを為
きれ人の恋をるをもの人を者をハをを者をるも
一一句一歌のををれるををおるも一るれ人をハ
をれれ秋のををの人ハ世の奴も吐をを入るのハ吐色を
人を文をし
一名を思ひ見をおるも一且号の伊御をををハ為人をる
をの人を学を事をををれ走ほし者ハ跡をふを
世をを思一をを廃食ををををを
右の海く系門の行脚ハ性も人をを代の稜
ををを御する俳宿一人を外一不を通を実を俳を

利体の句に俳をなして世をたすくる所也しからバ中ごろ
古人のうたを見るに其のうたのすがたにおほくかはりたりしハ踈
きな事なきゆゑに物数を見る事の詮なくして初心の助となるべし

一 蓬莱に聞ばや伊勢の初便 翁

翁深川より去来への文にかきさかしくの清きゆゑにや此ゆへに待
ありし事なども故又ハ古びの俤とかや伊勢のと待るハ元日の
式のさまをおもふぬる神代をもいはゆる俤を見るやうな先祖神の
ことや胸中をさまのしかそこばくに待れとかや 翁近ごろの
此身が物事ともかくもにて今日神々の如しとしてもゆかうこともおもひ
かゝる道にて和歌の詞を使ひ神の一字を冷し清浄のよろしき
を蓬莱に對して詠ひけるとかや

一 からさきの松は花より朧にて 翁

伏見の任口が角の論より其角のこころしハ沙汰かな此句の弘首
発句にてもし句の末にをしき留り此ハ句切近れハしましらんと待
るとし是丸にて句の末ハ其角ハ翁此句の又是ハ第三の句也し
いへ発句とれすれしまでや是ハ是ハ無難偶ありし発句
とらぬ物にれハ第三ハ句ををに済まりしへ句を済まれんハ
第二第にいふん翁是し曰其角も末に翁にれ理屈と書れ
只花よりも松の朧にてやましきいましのみとし

一 或ひとからさきの松はいかよう朧にてし翁曰万寸の上にお
れしいくさしみやまのに入ほに詞にもしひしの言ゆゑの
たゞをたゞ只眼前なるかれとすまれとぞ

一 或人此の如し嘆ぜしも切字をさゝへし去来其角子諺に其角

白炭ハ切字のてには成候はゞ何にて白炭を忌めけり
翁曰発ハ切字のなくても発の法をしれバ発したる句に
かくれし只眼前の実景を画きゑとして及ぶ先これの前
しらぬ先達は此句をとあるところを知らぬとの句白炭と切
字を入給これをしるべしとも

一 行春を近江の人とおしみける
翁曰尚白が難に近江ハ丹波にも行春ハ行歳にも
ふるべしといへり汝いかゞ聞侍るや去来曰尚白が難
あたらず湖水朦朧として春をおしむに便有べし殊に今日の上に侍る
翁曰しかり古人も此国に春を愛する事をさをさ都におとらざるものを
去来曰此一言心に徹す行歳近江にゐ給はゞ
此感ましまさん行春丹波にいまさば本より此情うかぶまじ

風光の人を感動せしむる事真なるかな翁曰汝ハともに
風雅を語るべきものなりと殊更に悦び給ひけり
一 此木戸や錠のさゝれて冬の月　其角
猿蓑撰の時此句を書おくり下を冬の月霜の月と置煩ひ
侍るよし聞ゆ然るに初ハ文字つまりて柴の戸と読り
先師曰角が冬霜に煩ふべき句にもあらずとて冬
此月で入集せらる其後大津より先師の文に柴の戸
にあらず此木戸也かゝる秀逸ハ一句も大切なれバたとへ出板に及ぶとも
いそぎ改むべしと也去来曰柴戸と此木戸と指て勝劣
なし去来曰此月を柴の戸に寄て見れバ尋常の景色也
是を城門にうつして見れバ風情の物すごく
いふばかりなし角が冬と霜に煩ひけるも理也

一　くしやみ　ひとしなみ　猫の恵　俳人

菊の白と伊賀と言葉を交へ侍りしの一句

ひとりかしこ言ふ人かれ　かれの風雅を

ひとりとし見る人の名田方言く人の見わす

菊白かれ無れども変千歳を知て本性を知ること

宜しきこと

一　本こうしに二ツ月の白の咲ちらう　芭蕉

本こうしに此地千と云ふ時の句　士朱

本を二ツ月と云ふ時ちらと云ふ

千ちとれと云ふ菊を云ふ白二ツ月と言ふ

千ちと月を除さと云ふ白八月を以て云ふ

今俳のこれ白し此地千と云ふ言葉し

一　菊の白を伊賀の俳句の作し　伊賀　秋水

菊の白を伊賀の俳句の作し　杜子

菊の白を伊賀の俳句の作し　日

なれども千ちと八月の句なり　士朱

越ちと千ちと言ふ　水し　茶の見

黄ちと言ふ　日

ちとひとの舌千の千和の変　日　士朱

浮ちの世ちと言ふ　俳　士朱

一　うれ八美文古の本後の句書　此の句し和の

冠八世中とし菊白の白八今詩を以て作ること

文字無くこれ風雅の時

ふるしひゆるを改へし今の苅に直して入句とすべし

一　おくれ樽しかへぬらん郭公　野水

猿みのの撰の時去来云此句ハ晩の時を撰集にもいれむや其

まゝ同意し入集せんといへバ翁曰が石の鳴とりまでうち去

来云何しのほとゝぎすバしらべ只さと船とかくるのこゝろ主

時も猶敷し　翁曰句のくまくにむずかしくしてハ一句に動ゆる石

とや文をさしても入ハ入奈し撰者の心入でしこと錯とされと

深く侍る

一　是ゟ去　故郷を前景に極りぬ　去人

翁去来ニ語て曰其句ハ前景をされハ去の句に陳けいは今

句殊ニ前景をうちと見ゆるハ文章みも去来ニ此句放帳ニ

前景に極まるましとれにて有新鋭朗なと置てかやの

其句も未だへし此上がくらぬ事を君の代に引らけて家主也

此し侍る原心年く句者撰ありいひ此の句を以て論せ小ある

思ひて小来酒ゆゑぐちず處をはへるのうへにも

一　振舞や下座に直る去年の聟　去来

去来云此句ハ去年の聟ハ客ばかりて他をよる文隣古烏帽子哉

其角かきれたる京物ハいハ心撤ちよう付さしやわ秋やの歎

ハ地が引去今の苅を置て句いうふれハ翁曰奈文字にて心を也

く置ハ作法の人の無や手にて十分そありて振舞をも極見

こそへいとやされしやと

一　田の畔の豆つたひゆく蛍かな　万乎

此句初ハ翁の斧正ありし凡兆か句とし猿みのの撰の時凡兆が云

此句見るに取り所なし除へしと去来云過し豆をつたひゆく景

光関の松の寿も風姿のうるはしく北ゆるされし菊四郎は拙ハ
秀ひろくん寿伊賀の道中の句千尋千仞の高きを互
ーさく此句とるべんとして孫千万乎の句としなるべく。

一　大寿をおすくハ年はかるべうれ　凡兆

元の李文字忘れて寿を本の句し寿ぶ貴白雪の
しハ信徒之光輝と言へしハ花元雅人の如くとかし寿を本を物
まえ来迎ゆう時人の前をゆくとかたるを惜し
人をうらみ山外をいけ寿命のきこえ及ん
梅と宜ハ印て寿の敬とうるべ俗写なるべん信徒
称へ寿を寿を寿の句を信徒ハ信徒ハ知るべ
とかう千梅凡松大寿と寿と寿と寿四郎寿
の敬しいーくと寿るものの句と大笑ひーすひく

一　菊ハ菊と用ゆうるし花の栗　士来

菊四郎の栗とハ栗かれ花ハ菊ハ花ハ
や古人を本の句士
ー句ハ句と句士ー句ハ句ハ句ハ句ハ句

一　月雪や折ふしふるふる甚　伐人

雪ふの撰の月雪を頃る伊丹の句千鶴ふるーふる
ゆくれや折月雪ふるゆう伐人ふ句入集句の句ふ菊四
月雪ふいーゆう一句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ
句ふゆくれやふふふふふふふふ風姿ゆう只志
千鶴句ふ句ふ伊丹ふふ句ふ伐叩の伊丹を以
ふふふ折ふあふふふ句ふふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ句ふ又

一　きくれる雪の花　伐角

士来師ふ斜ふ伐角ハ俳千化考ふ伐ふ雪の吟

付さるにて此説の句ハ三盃さんとて此日志のりかれハ定家の卿
なりさしてもなき事をことゝしくいひつらね侍るときこえし
評に似たり

一　をとゝひハあの山越つ花さかり　去来

これハ猿みのゝ二三年以前の吟也翁曰此句今きく人あるまし一両年を待へしとそ其後杜国か徒と芳野行脚し給ひけるにそよう去来への文に我よしのにて花の山と云或ハこれハ〱としとくうなかめしに魂をうはゝれ又ハ其角かさゝめことをおもひ出しまなこをとられて筆あやつり句もなさすをとゝひハあの山越えつと吟しゐたるのみ去来云手紙の書を読ける人今さけかゝる今一両年をまつへしとハ此ひけんの事てきるゝ事と

一　病鴈の夜さむに落て旅ね哉　翁

泉郎か家ハ小えひにましるいとゝかな

猿みの撰の時此うち一句入集すへしと凡兆ハ病鴈ハさる事なれと小鰕にましるいとゝハ句のかけり事新しくまことに妙也なりと云去来ハ小えひの句ハ珍しといへとも其物を案したらんにハ予もおよはん病鴈ハ格高く趣かすかにしていかてか爰を案しつけんと論し終ニ両句ともにこひて入集す其後翁曰病鴈を小えひなとゝ同しことくに論しけるやと笑ひ給ひけり

一　岩はなやこゝにもひとり月の客　去来

翁上洛の時去来曰洒堂ハ此句を月の猿とすへしと申侍れと予ハ客まさりなんと申すいかゝ侍るや翁曰猿とハ何事そ汝此句

いうもおろかなるべきなれども本文を左角に楽しさ山路を分おしゆくるよ
君所より又ひとつ雑言を尺はちとせ以四つ五つ月
の雲とわのれと為のくもりさんてうにはくの風体あるべし自
称の句とあるべしいま句八系と孤雲しく筏のふるすに入りぬん
言葉を以て趣向八枝二三ヶ所とて作り物んはの句としれ八枝を
かし枝先の葉ばかりの句なれば過ぐる考へ自称の句としれ八枝を
ぬ殺ばかりのひとすれば句面にまきらてと十信きうまきうの化志
そのとき和さうう筏のふる八師の自撰の集しるとあてはまる
きうとんに草稿ばかりしに化ましかりきりけるに八ヶ所の句
句の集に入れるべし句ふる句四系河人筏のふる集に入句三句
おくるものハまれるんはさるものとそうとし

一 つくばうら 芭蕉 ほ こいめ 言さうの由 文草

筏新撰の高弟人とう数俳の句をすべて今日しう系孔雀の句し
一字いれ作ばかりしてふるとしさんしの作ばかりおくる作句孔雀
此一句のしく文字もれされうと言ふ本を作る射八うう撰ふう
新文作るべき毎を芭蕉言を抜くと量いとんんやとは作ばかり
抜ひ和作るう

一 こ系和 雪つむ上れ松の 雨 孔雀

此句抜ヶ新撰筏を作りしの新ふ撰ふ
孔雀ヶ上と差さいまと芭蕉言ヶ筏ふ撰ふ
しおくるものはし八系二度俳作をしふるとし文本を此言文字
ようとと八後くと和作れどもあるとうとくいてう抜作ふん
此句ヶ俳門の人抜作ふ八孔雀ふくいたの新撰ふ
筏しものハ文系言を言ふんとさひ作ることし

一 あの声しみ霜にゆくすやかの月　去来

此句ハ始ハ菊ありけれとも定けり去来抄なし
かやうて作とハいへとも此作ハ菊日に出てあるを秋のころの字ありし論なるを
やゝ去年し是もの上ならぬと申て志ハ古人ありし
是れハ又作名めして此く〔よ〕り出す入集の詠次かくる葱の風
とてよろしき和哥優美の上らさ〔へ〕作ましかけり作しいふ人と俳諧
自由のよきり出す哥の字色を化さんハ定すもの趣あるへし一句
打申しられハ是よりく楽しめれしとのくに許なるへしなると
去来その作者にて此句ハ邦なまやつらうるを〔と〕いふは俳諧大事
の和哥の同楽ていふしき趣なきてらを志れけるとて
一 去来か昔その集此作として中ん作者すまれたる尾張の人
其の集の名の風に一節評すへしと次之〔こ〕をそれとも一句に作す此

句を詠ふて能日出句ハ秋のことく賜へりしあ定ものゝ詠此
ともし之意側に出て大に其勤し秘す、出句くゐものにしあり
此須ものかへりとも去来主事ハ其のみさりへ字まにて此すくるにも此ゆ
作者も外くあらすんハ作のみへいと称とあけれとし
一 六冊子 誰のうしつけらや条さくら
一 菊の上て去来を得て曰此は其角の集を此句ゆりいのて比ひて
入集しけんとし去来の名様の才にて吹くる新窓よくと環
に作ふやや菊日の縁そて作り何る去来ミにおいて肝に誂
すらくも何り如て出句になるへきなとなかしなて代志れくしくを
一 手をはなつ中におちけるおぼろ月　去来
魯町にわかれて此の句に菊日此句ゆしきいふハいかにも功者なりと云
いひとまもふりしとき去来ニいひさるさして句ハなしとを句の上まて

はやつくる両吟も無ければ只さ十分に帰る事ならん事を心中に一物
有れと句の上には顕れぬといへども趣意にて句を見るべし

一　泥亀や苗代水に暁しつ　史邦

暁らの様子を某深て暁つきたるに古人より翁曰暁つきたるひと云ふ
とこそ能く風流格なる暁と暁しくて暁事執りとも
作者のけしきを活やかにして本の気のつくに誠に句をなすこの
見るべきにて作る気もなしと探題あるべし

一　声あらしくにとられは凍しまぬみの月　宗次

猿みの撰の時宗次今一句の入集を願ひて数句吟じ作りとて
てあ句れ一夕翁の側に作りたる名所ありて入集もかはん
と言ふ体ゆるしは声あらしくにとられは凍しく作れとこそ翁
曰これらこそ発句なれとて今の句を作らせて入集させ玉ひぬ

一　玉棚のおくなつかしや親の顔　去来

はじめは体のおもみを思ひしまゝにとを句にして此時去来は宗
の好む作はいまだ有りてともなれば玉棚のおくなつかしくと作る
よしをアおくさにぞ事にて去来初めの意味なるに此うちに八言み
て説かへくるほと玉棚のおくなつかしや作る事に仕立て句に
なるにてやと誓しかるに文字和らかなれば心を付けやさしく歌比
見て是は句となりてしと去来に手をはへ直す句なるべき
しれ深くらひ深きを知てひ深く詞をゆづる我はひたしと取りは是ぞ
は初心の者の学ぶ様なくおすむしけやきて直て無く作るべきれ則
体のやうをしらく下や

一　夕すゞみ疝気おこして帰りけり　去来

去来初学の時発句の仕様を問ひけるに翁曰発句は頭よく作意

たゝる俳とゝとゝ試て此句を紙一さう言ひられハ又是ハ
別して大ふくらひ一ものひろ

一　けうゝゆふる俳のゝけゝまゝ　くゝけ　滑力

ん紙に此句を書くけハ麻島ゝとられん吉来ゝ麦庵ゝ来ゝ
ふくけと論ゝ菊田又ゝゝゝ如ゝ俳用ゝゝ制ゝ
ゝ尺ゝ人ゝ来ゝ

一　ゝゝの一句ハ俳の少句ゝ　吉帆に　帆　吉来

吉来ゝ様みの八村原の俳ゝめし此句ハ此集の巻頭ゝ此句ゝ
ゝゝひ作ゝ只ゝ句ゝ紙ゝゝけゝ一句ゝゝ
吉帆ゝ千年ゝ新ゝ句の俳ゝ
俳句ゝゝ又一句ゝゝ

兄才北京兄　金ゝ　吉来

吉来ゝ此句ゝ自世分の板賀奈兄才の五千部人金ゝ
俳ゝ別ゝ俳ゝ俳ゝ吉来ゝ実保戊の初ゝ雨の行脚ゝ
ゝひゝ此式紙ゝ
日ゝ系庵ゝ
ゝと俳川ゝ俳ゝ
ゝゝ句ゝ句ゝ
俳ゝ句ゝ

一　みゝとゝゝ　むゝ　横　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　吉来
吉来ゝ和八ゝ句ゝ
俳ゝ句ゝ
ゝ附立一作ゝ吉来ゝ

付句れとよく尺にさ句なやうの前段なりけしはこはのつの発さと
此のしてん段なり候へしと思ひ候へして付句に付る事と中箱田紳の
句なり八三十棒なりてし候るけるへなひに直すへしとして今の五文字
まえなりける

一 梅手まめ此枝の百ならぬ　吉木

これハ案旦の俳諧箱深川にて出る日此梅ハ二月のさかりしに吉木が
千也ひ深にて案旦の服をも用ひてもこれかん

一 舟もし新手西玉の子　宜桐の句に

はこ此識手直をも句の付此句も長をつけるは吉木が何やつ箱田
も八手帳もしき句きつぬ付る是六八手帳にしも長と続へ扱いて箱かさにて
上章の付吉木四て出ける何所すて帳手付へやつ箱田舟の中にしてまれ
すへ云へし西向のてさ散にしてある事のかうとなん

一 弓張は角さしかへすり月の下　吉木

吉木句ニ出せるも手帳にかくれや箱田手帳に出られたやもと箱とち弓
張といひしれ一句成けれ

一 下り ちつ 花ふ まつ 深しきく　見兆

これめハ雀もし見兆か扇書の出るとも中へ入る箱田きつへうへつのふれたちれ
と古額より出てわし二句すさえ次ふれ一句なくてもたとのふれん見兆のすも
ゆへとなむ

一 妻もよみ きこ此身を詞しす添　吉木

抑ハきしみしろこえて聞中し箱田吉木別人々の此ところしも次御
抑そを句ハ次めとこそのほう同しくをなすてそ次めとんかなるものをきとし

一 けんとめけさつ池の葉つの実
咲ともすかさかたる梅のかつくさふ　箱

此前句にて付去来に前の前句をはなれて付んとせいしたると翁
此付句にてはさけたるハかく付まじ

一　くろふして青き櫻の木み　森

　　咲花にちいさき門を出つ入つ　翁

此前句なりし時去来云前句今ぞ櫻の木の森にてと云ふ其
景色をうつしたる花を付る事最初のつくしき所の付
句と見られハ前付に尺る所なり

一　猿比ねむまはりつきの顔

　　注しもちひきふとこちもとめるに　去来

此前句むかし中すとしく付あくしたる翁曰上臈の袷
なくしよそと去来これをあらためやかて此句をもて付侍るなく
好春に上臈の袷とめでくさいて句からよき門の流浪殊猶

一　おもしと盆す

　　ふくかわれしや秋風　正秀

　　中きんし中きりゆくる有新月　去来

正秀亭の初会にはしめて竹格子新もまくらに月汐さと
付侍らんを翁此句ハ発句の句のひくき其夜翁去来で猿
也深亭に一座す翁曰く秋くしめて正秀亭の会に珍客な
れハ発句ハ家にくしと思ひ見悔すへきに其上脇句と
気ハ秀拙を見られ異ハもすへき其夜一夜の誹しいふはくら
侍る此の発句ハ対さしつさハも句の会やかしらんはやらくせ
風情の者し不興に侍る相手発句をもまさく正秀恩胎を知
す二つ手よくしとそけしよりの手きまくして前の句やう前
中三付るの前句のけしきて探ひ之未練のふたつへしれくせる

去くの比ひく去来に其時の有様を尋ねしに答て
とや一句作りかくと只月のさやけさを愛していくんとの心あつて
こ往きてこれ作りてやゝきて翁曰其句をもさへいくくくの酒
なかんは此度の撰所の秘とも一とひらんてとも思ふ志し

一 ふかみ砂しき更くと志らうく　須　去来
俳第生まおりんけつく作見給　翁
翁於まり此端の先人の文字は句を去りし此趣の化尤いやさ
此付味をとられは手元随分捌くと云ふ事して有とし

一 赤人の名は付られたりくつかすみ　史邦
翁文字曰中七文字能聞れり貴句の情多く元味おさ[illegible]とし

一 弱竹の本らやもとん三ヶの月　去来
そやひゝらん空月の韻とていひとも多く本句は如かん哉

此月よしといへり翁曰此句ハ等閑に聞くへからず句のしほりてかくきり

一 そらの年鬼の住み拭うく能　翁
兔角町に此句をよめり去来に其書をよ俳しおひしくて流れハ子
俳の業しとおもふくしきて理会もへかくは撰集もて路破
こ心へしむかし翁此句を語りわかち乎墓[illegible]翁曰云
見よと猪んその御よ候人のことゝ云ひしは昇して無くて謹言
此撰集なりしとそ

一 梅の花赤いは赤いは赤いはな　惟然
去来曰惟然坊か今の風大かた此類也是等は句とは見えず先
師遷化の年の夏惟然坊か俳諧を導き給ふに其秀たる
口質の處よりすゝめて磯際にてされしと怪おさへ歳八歟
此本をすゝしと風の吹ところなどいふを貴しとす又俳諧ハ

年気ニ以せ分おゐて作るべしと言ひ又此ほいちし風説脞
うるれなとのまゝひるゝてこそめでたき心ひ分切字引付てみ
つゝなれ此集の句作に侍る事あるとてきし此方を細しくすてよく見るか
とく此両の句などを評しかるひくて句数句姿なとしてもの
物語りハこれ志都をもつて見しるべし
一 卯七云 発句に切字を入ずしてハ初め中末に成り侍りて爾回に切
字なし 初め中末といふこと侍候所し自分に覚悟し侍る爾
回め中末にもとれハ発句ハ一本の木のもとにいふとも梢根と
脇句ハ枝の如し 大かた同じいふとも全く梢根侍る句ハ切字の
ある世に入る発句の話しに爾回無くてれとも 丈ハ侍を知る
なく是を伝授すべし 切字のことハまゝ俳ともに深く秘するこ
ありて評ふらく見る此に示して多くしとしても秘すべし

ましハ是のことなれハ其事ハ志ばらく差置きて侍る也 一切字を
入る句ハ句をきる為に切る句ハ字を以きるに及ハず 切る句ハ此
きれさきれざる事としるべき也 先達の見え先達切字の数を定め
此定字を入る時ハ十に七八ハ其のてうか切る也 然二三句ハ入て切
れさる句又入ずしてきれる句あり 此句に於てやハロ合のやしハ
色字のしるしきれ候哉 ハ是ハ三段、切れハ切れの切れとも名因に
伝授ある事のミあり 又丈草に向ひ問曰 発句ハ三十一字にしてきれ発句
八十七字にしてきる丈字撰入るゝ又或人に問曰 切字にて関る附ハ
四十八字にして切字ハ用ひざる附ハ一字も切字なりとし是ホハ
これ他言なく秘して隠す一事とも承すべし
一 卯七云 猿蓑の序 花といふ 横手そるゝてハ初め中末に此附字を
夫と横手撥んといふ 問曰 花ハ初め中末に分れて花ハ横手にいふ

[illegible]

一 卯七月ハ蓮門忌也一句ハ[illegible]

上五句となるこれ礼式の法と一句ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 外七ヶ条門子宵闇を用ひ行や生年を以すゆゑ墨
ヒ流門の舎子宵闇の句ゆゑ宵闇を用ゆれハ
外子月の句をハ拙くしと且子月を用ひさる句面子
月を尺をとゝのへとゆゑ月次の月の字を入ることゝいふ
一 西鶴ヒ京武の舎子舎を舎と和歌ともに嵐也を嵐する和
曰舎を和歌ともハ西月ハ神祇なるゆゑ生年ともくゝ
ゝ退ることゝ子ハ生のさゝ反ゆゑ一句ゝ和歌なく
ともハ既ゝ舎ゝ舎ハ和歌なゝ中えをにくゝゆゑハ
と西書ゝし
一 和曰西上の俳諧の文を尺ゝ武浮文を編子和ゝ武
年和歌の文字子浮音を入て系ゆゑくゝいゝ別し
武ハ人語をいゝ今日のさのしゝくさし拙ゝ

西鶴ヒ流ゝくゝ外流の文字ハ句ゝ化文を
立文字ハ拙ゝ浮音を加ゝ和歌ゝ武ゝ浮ゝ
俗の字和ゝ武ゝ西ゝくゝ
一 和曰漢名和の義句ハ世僧子西の句ゝ尺ゆる拙ゝ化
和りの僧を定家の紙子を立ゆゑの義句を拙ゝ用ひ
ゝ武ハ拙ゝ武ゝ
一 和曰俳名ハ俗ゝ子ゝ武ハ俗ゝ清ゝ洒ひ字形の
俗字ゝを用ひ種冊ゝ和尺ゝ和ゝ武ゝ
子ゝくゝ字形ハ芭ゝ
自俗ゝ武ゝ文ハ名子用ひゝ
又の和ゝ文ハ名子用ひゝ
一 ゝ本ゝ武ゝ墨の寸法ゝ竪ハ表紙の三分二ゝ横ハ

一ちとせ経たるとやらん桂みの一対の言ひて姓を変じ
一勇所之歌猶るは八古本より季を不生事を受侍さ代の白
き和て八侍る古本の季を代ふ代とし季を無くて物語八えう
八四一代四季を代の一を抜しかれ八侍るよりの弱し
とあり侍るの歌く古本の季を代ふ代とし季を海
日を和八反季を定て古本より白を代侍りとし
一古本に俳諧集の抜ものを代とし代を
侍り物集の社を代ふ代とし代を折すひとかの侍れ代を
集め古の歌を多くて昔古の中を入をとれ代を代四俳諧
古の名八多く侍る文史紀物語を代とし代を
されハ文代の名ものを代ふ代を代をみ引梁三の月を代を
代さと様みの菊の名原筆の小文を代をの世を代さし浪化集

の対を後海とあるみ山を号す後四を為所なれ八を侍
代し浪化集と呼べしとも
一菊老を代四上を代宗因なるん八季を俳諧を以貞徳の流を汲む
歌一宗因八代ちさの中無開山なりと言へり
一菊四今の俳諧八ち代上文を代し帝王時を八年を以吐しを代
年を代ふ代とも
一古本に代八門人を数を代を用れて代成八夫を代かをとる
を代ふ代を代を八を代を示しを代ふ代を代八白をさの名を入をものを
時を代又一白八まつをく俳を代しを代をしをとん飛を一白侍を
十七字一字を代おろを代ちに至を代ふ代俳を代を代を代を代を代を代を代の一説
ふを代一白を代を代を代を代を代を代を代

義て曰我自ハ法うてとく物ニ三ヵ葉ゝ物ゝ
ゝうてとくゝうゝし

一詩ハ言ニ我自ハ古今をものし菊曰られ詩と仕ゝ
ゝ事ゝしゝやゝし

一古本ニハ曰句子自然ゝいゝ
ゝゝゝゝゝゝ小歌ゝゝ
と化れハ自然ゝゝしゝ
古人ゝゝ物やおゝゝん
一菊曰我自ハ言ゝゝ
うハ付物ゝ
を以付ゝゝ杜年ゝ
古本ニ文考ハゝゝ

いゝゝゝ文ハの詩ゝ
赤人ハ為れ詩ゝ
ゝゝゝ合点ゝ
ハ曰ゝゝゝ
れゝゝ
ゝゝゝ自他の
ひゝれハ冷暖自知の
ゝ赤人の為ゝ
ゝ作ゝゝ
ゝゝゝ合点ゝ
ゝゝゝゝ
ゝれ物ゝ銀ゝ

文邦　古来

ゝ手本ニ十椿ゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝ

[illegible]

一　若竹手ぶくろ　いのちうれしき　撰集のさま

前ハ和歌の奥儀ハ[illegible]ひと付ける箱日記と勅撰国[illegible]の境界と[illegible]ふ[illegible]れと[illegible]ハ[illegible]

只俳[illegible]仕[illegible]

一　[illegible]

箱日記[illegible]

一箱日記ハいろはつくりつけて[illegible]天象部人事部[illegible]

多歌のおくる歌[illegible]

一箱日附物[illegible]

[illegible]

一箱日[illegible]

一　[illegible]

箱日記[illegible]

一　[illegible]

箱日記の[illegible]

一　[illegible]

箱日記[illegible]

一箱[illegible]

代一代ごんや菊田吉代ごく今の流行にて五七五七七又ハ又一変
ゆふんとし
一文革田長哥短哥ハ古代ハ長哥ハ短哥ハ菊田哥のごとし
もとうつり長哥短哥ハ古代ハ長哥ハ短哥ハ時代季節事物
とうつり長哥短哥ハ古代ハ古今集
千載哥ハ新古今哥ハ時代の風俗の長哥ハ古今
ようなる長哥ハ人麿ハ不及ハ
本朝哥の際ハ短哥ハ長哥ハ万葉集ハ
ようなれ三十一字ハ長哥ハ上古の哥ハ皆
ようなる長哥の代載ハ三十一字ハ代
及哥ハ長哥の哥ハ三ツのれハ長哥ハ代哥一
哥ハ二首ハ長哥ハ三十一字のを短

哥ハ長哥ハ短哥ハ長哥ハ長哥ハ長

定家と降を作てとて貴之為恒さまよされるなるべし

一 西行の西古今集よりやうやうしらるめ中ちて後なる人をしらるめ

花のあるべしんまを中しらるめ中ちてあるを吹あるを一巻中に三度と撰す

一 集一代者千かやしのくすの後はるを菊日無之のあるをけと

としをしらるかやしのるすハとの人ハきくをとをとをハきしハすと

としをしらるもあるこしの詩をもとを花の後はるをやいつをれ文章の

詩歌千杜子集ハ今ハ中ちるを詩人のを歌とやるん

詩をくをあくをるすをしられとをれをしら

一 本節 同中詩の歌人ハ詩をるを菊日面白と強金の右大臣

をるん

一 本年の西古今集ハとを除ハすを古西年あるを菊日定家ハ以

のなら西年ハとを西とのをハ定家卿の撰歌をのるん

一 歌人同古今集の部と六義を説季吟俊説ハ六義ををうの

主義ハのしれるをるを花菊日ハをを六義ハ詩のををあるを歌

をりしをハ詩をを一撰のをを行れハむをれをいよを六義ハ詩清

ハ説をハのしれ季吟季吟をを西しを季吟ををを本をを歌の

俊しとをを季の俊素を季の俊をを季の答をを詩をしをまを俊

なををを義ををををしんを義ををしを撰をををしをを俊詩

頌の内を俊ハ無ハのをを俊をを義ををを撰ををを見をををを

をを引をを義ををを撰ををを撰ををを見をををを

論ををををを六義の詩をを歌をををををををを

をを義をを俊をを俊をを俊をを俊をを俊をを

をををををををををををををををををををををを

の二ハをををををををををををををををををををを

一素堂ハ今の人ニ高きよりもすぐれ侍る歟
人ゆゑ素堂ハ詩の三百篇のごとし　芭蕉の俳諸ハ
詩ニ古今の能ゆゑ詩ハ俳の体又俳ハ詩の体ニ
見を用ひるとて俳を虚ニ成さんやうなれ伝て見れハ素堂
芭蕉ハ詩をよめるハ和歌の俳諸をしらんとやいなん古今
集ハしら俳ハ詩をれハ集ハ俳諸のゆゑ詩ハ俳を
よまんハ芭蕉ハ風雅ハ其材をよまんやし千体載のごとくし
くゆゑ詩ハ俳ハ詩ハ俳ハ詩ハ俳ハ

俗文をもてもてはやす外に文の結ハ俗てもよかるへき文哲の文をも
ていとかくしてわかく雅文をもて俗語文をもて思ふ事をかくに
ハ俗語ハ俗語にて俗語文をおもふ

一感を発句にしたる事ハ俗語の物語をもて
西行の例をもてかくるをもて文華を弱して俗語の物語をもて
俗語の事をもて文華を同文をもて事を兼ねる西行ハ
全体の俗語をもてふるに後の俗語をもて
草を山ハ只青山雲ハ只白雲をもて俗ハ実をもて虚なるをもて
一歌自の姿ハ青物の小角をもてかれしてさわしく微風のなかれ
なるをもて物のもの隠方ハ自然手柄の物なれハ
物柄を論て琴をもてをもてをもて情ハ心表の志をもて表の去
物の角をもて歌をもて〳〵ハ飛流の形をもてをもて自をもて

一式ハ古式を倣へ
一まをもて紙ハ古書をもてもてへ
一古代の白文をもて用ひる系白を人を読ハ系都合ちを人を
ちをもて
一会席ハ一ハ中の分位をもてをもて
一尺をもて書ハ俗語ふる翁曰尺をもて書をもてハ外儒俗
ハ古をもて俗海陽海をもて
一俗門を交をもて苦しをもてやをもてふる交をもて用ひるものハ
持変をもてをもてふ〳〵

右七ヶ条ハ枝を翁の問答ハ
一西行の俗語をもて心いを和翁曰俗人を先ハ俗語ちを
ちをもてをもて遠奇ハやをもて奇ハ上ハを多ち一句をもて湖

ひとしくこれを以百歌の句を聯の字義と俗語ハ但さて
我国姿の変化ハ今日世俗の言葉に系俗語ハ世を用ゆ
又ハ俗語ハ言葉を以一新とし字義をとくハ人ハ格ハ中
古の俗語をひとし遠方を注して古きをひらくに当りて
遠方ハ古句を敬ふ俗を大うるハ時をさかしして利ハ
俗中ハうしの俗語を大うるハ時をさかしして利ハ
系俗語ハ古句の世を知ることあり一句の上句と義合
句の情を拾ひ知ることしハ先のうるはしく俗の紫
色の句ハ句の意をうしなハ遠方ハ遠方を上句を
句を志ふるとて

船つなぐいうはけふの波の上
海ハ千年ふれそこくしきとて

と付ふるハ上ハ上ハ句ハ千年ふるの句ハ句の句ハ
句ハ句ハ句ハ句ハ遠方

ゆうべ
次しの春ハ月ハ春ハ春ハ春ハ

とハ句ハ句俗語ハ句ハ

秋ハ
俗なるハ句ハ句ハ句

俳諧とは[illegible]さる人は歌を詠ずるに[illegible]
するものと歌をも俳諧と[illegible]
[illegible]人は俳諧を[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一泉の児奥京武行の庵にて菊を詠ずれ
[illegible]
句作りとて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是別段とかくこうなしおるの物をそこの苗の蝶のあるハ法
ようなれハ更ニ一句ハ無きもの
大性の大いけを拵をきつまぎ　下芦
とも無きを嫌ひこと人物情を所まし句をそこと
以ニ一句ハそこの前の句の法情し新新ハるの必ハ法ハる
拵ハしの句ニ

一石　みみ　しつ　ハ米　法圓

とはなるを無きをハ人ハいひをハ法ハ必ハるこ
大性の大いけの一句をハ尺ハ法ハ去法ハ手法ハ拵ハ
をハ一千人の情を以一句の生ハ所ハ人ハ法ハ
ハるハ考なること初ハ法ハ人ハ法ハ
さる人ハ必ハ人ハ法ハ人の法ハ

法ハ法ハ松ハの必ハ法ハ法ハ法ハ法ハ
いつし問ハの物をそこの苗の蝶のあるハ法ハ
こうしこそこを尺をこの村をこの法ハ
山地の高ハ八ハ一上ハ乾ハ法ハ法ハ法ハ
ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ
高ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ

ほうし　和合の　勝手ハ法ハ
とる句ハ

ほ以　袖を振て尺をこの　西ハ
とハいこの法ハ和合地ハ法ハ法ハ法ハ法ハ
袖ハ必ハ必ハ是ハ必ハ法ハ尺ハ法ハ眼力ハ法ハ
とハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ法ハ人ハ法ハ法ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

安くかの事をなげき苦しめ給ふ人〻は是おのの技術
をもてあそびすぐるまでの人〻なり
世人うたがひのこゝろやすからず
一世間の雲間なくなげつゝあり集俳諧といふものの
翁四こんの年一きやうの歌上をなすべきことをへくわ
さらに多くのうるわしき集をあつめ
詩をもてとなすべきことをしるべし
うゝ俳諧の人〻は俳諧をもつて宗因をもて俳諧をもつ
て無をもて宗因をもつの俳諧ハ千年
の後の今日ハ千載の人〻
こゝ集をもて光りをあらはす百代のあ
ゆみをもつて今日ハくふる十年ん

能をもつてこゝ
ろをもつて
れハ
ゆ
きをもつて
多
年
し
ゆ
ゆ
ゆ

世一代集の対八雲の事書とおぼしけるに風躰し又古今新古今
一一千代々の風躰を取まぜ世はうつり詞も八代風躰の
さまとうつりかはりたれども八雲の歌ハ
そうにいとをかしく俳諧とても同撰なるべし此ごろ貞室の玉
海集のごとく花月雪の文字の文字ばかりの文字ばかりを数
多集めたる人の自らの集のごとく八雲の歌ハ
されハ俳諧に風躰ばかりを以て歌ハ
以て歌ハ二三字ばかり同志ハ撰者先生非分のふるまひ
られをとりてとりてかの日千人の長ばかり
同じ信の自とりとおもふべしよりん文八とおもふ自ハ
ものとおもふべし上ものの自八俳のごとく

きとうあるとおもひてはこの俳諧をかきあつめたる集ハ
きとうあるべしとおもひいたる集ハ新撰尺八の集ハ新撰
俳諧の一躰の姿ばかりを新撰尺八の集ハ
手良宗家因歌の自とのごとくハ新撰尺八の集
きこの俳諧の俳諧なるべし
俳諧をおもふべしとおもふ
俳諧ばかりをおもふ
俳諧を俳諧とおもふ

一今宗匠の面々俳諧を俳諧とおもふ
宗匠ばかりをおもふ
ばかりをおもふ

[illegible]

一 季節を感ずる概者は全体を見て[illegible]

[illegible]

一 秋の所は全体を見て[illegible]

[illegible]

やうしるべの事[illegible]

と一句の[illegible]

[illegible]

中とうけ[illegible]

[illegible]秋の切[illegible]
[illegible]枝の先[illegible]
みて小枝秋の切[illegible]菊日ろくと會[illegible]
千秋[illegible]
切[illegible]
[illegible]枝[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]菊の[illegible]
[illegible]
[illegible]

一菊を採温室の外小枝の葉間より挿[illegible]
[illegible]
千秋小枝の白子

菊[illegible]

[illegible]

一尾張国八江州大津の[illegible]母[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

秋のいろめのうつりて　[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　新蕎子小坊主のうや大根引　つゝ

作らるゝ日大根引八起子ゆゑ大根引といふ

あるとき大根引ふしぎ

一　翁曰俳諧きるゝ八雅意取りなるべし

俳諧ハ作意ハ作意ハ作意ハ

家と家白のようにかくしてしかるべし

天竺子兼二人坊主ゆゑ一人八年老く一人八年老く

婦人ゆゑ兼の方へ坊主に成女の髪をかねへ足を髪をあく

又ハ剃ゆゑ女房の髪へ白髪をあ

くゆゑ兼子家しゆゑ坊主なるゆゑ成者ゆゑ

是亦和子及ひ式をうしなひ猪ゆゑ上ゆゑ

もゆゑ及ひ式をうしなひ式をうしなひ

よけれ五子曰為容不仁仁者不容ゆゑ式を能くゆゑ

一　聲ゆゑ式を能くゆゑ

一　人のたくを看くふゆ

一　香門の人八茶漬三石六斗味噌上ゆゑ

たくふゆ

一　聲ゆゑ式を能くゆゑ

谷口ケ原紅葉の解説をおくし

一　翁文叶を言へ言へ叶信此を十さみ言て人の上手ゆゑ

ゆゑ角をくゆゑ

一　翁曰句と句と一枚ゆゑ成さく無ゆゑ

一　淀六月元禄五七月朱武をおもむく対面をんを俳諧

町ゆゑ深門を俳句を再無ゆゑ入手手しに戸名の数く

[illegible]ゑ[illegible]桃陳を引しさく八月九日深川の花をたくさんに[illegible]
[illegible]の[illegible]一[illegible]宗桃陳[illegible]桃陳[illegible]
[illegible]白[illegible]

七月十四日の歌合四金谷の[illegible]火と天と[illegible]

[illegible]吳[illegible]て越[illegible]大井川

十間[illegible]秋の風

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

他門ニて法ヲ一人も受取申ス法ヲ通りさ
し是ハ大ニ不宜今日ニ至ると大きニ悔ひのい撰集と云
て法ヲ手ニ入ると申すし此ヲ称して手ヲ不零ル来
つるし男子ニ付他法ハいひ繋と云ふ者ニ対シ曰汝
ヲ師ニ依て普ヲ他法と云ふ他法と云ふ者ハ能
法ヲ会ニ会すと云ふ氏一ニ力を入て戦慄すヲ
されハ左ニ討死の汝しめ与ヲ心中大ニ怒て
依て所ニ力を入ヲ手ニ対面をヲ以て普ヲ方ハ
点ヲ元自百四五十ヲ与ヲ与ヲ与ヲ点ヲ
之所の自ニ摩羅の点ヲ与ヲ点ヲ大ニ一点の
自ヲ与ヲ此ヲ汝の点ヲ与ヲ自大ニ一点の
汝の点ヲ汝ニ与ヲ法ヲ与ヲ書ヲ与ヲ
汝の点ヲ汝ハ普ヲ汝ヲ汝の絹ヲ与ヲ与ヲ

ヲ以て年完他法ハいひ繋し決定と与ヲ又問ヲ之ヲ他法と
普ヲ他法と会ヲ会ヲ与ヲ法ヲ与ヲ法ヲ与ヲ
会ヲ与ヲ法ヲ与ヲ不零ヲ与ヲ
ヲ与ヲ法ヲ与ヲ与ヲ与ヲ法ヲ与ヲ曰汝ヲ他法ヲ与ヲ
ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ
ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ
他法ヲ与ヲ他法ハ行を風法ヲ与ヲ
ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ
ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ
筋骨ヲ名誠ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ
ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ
ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ
ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ与ヲ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]八[illegible]

一[illegible]八[illegible]

一[illegible]八

[illegible]喫し[illegible]日糸いとさ君家こつえし時後の季冷の[illegible]秋[illegible]
き[illegible]の[illegible]しさ[illegible]れし今八他此のみ[illegible]
生涯の[illegible]し[illegible]寸[illegible]
[illegible]く[illegible]通の[illegible]を八[illegible]

一 世八角こ[illegible]月十四[illegible]
[illegible]植[illegible]
[illegible]

松の[illegible]

松[illegible]

[illegible]八社人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]八[illegible]
[illegible]

一 廿角[illegible]郷の氏更科の[illegible]

供 や 妹 [illegible] 方 の 友

[illegible]
[illegible]

一世角言菊の雫清水を作者の世俗の臭えをまれおのうるを毎年
のをとくをとくとて清きをもうしさしたかつきをへて清水を吸めれ
八年ぶの気をうみて後年の庭をやゆるうしうるみてかう
き見をもて吸ひて脳をうるをうみて乳角さへ入をくをく
みうるを式をさんとうをうに仁心の義勅をうるをふれをいひ
をうをのかをくなをうをとをされうれ八年法をうを
うをうるをうをつをうを 枕さうめうを
をいふう

雲のまをうを枕八舟を乳をのむ
をけうれをうを三才図会の話れをうをうをうをまをうを一日の蓮
雲をうを及をなうをうを附白八味文冊のうるをうをうをうを
をうを菊尾張を

やをさうを清をけ泡くを小和ふけ をう
をうを日をを仕合ををれうれ八蓮泡白のををいをうをうをを
うを人をのをを祈ををひをうを打ふをけをうをうを外御祈のうれをを
付をを八年のをををを五年仰ををををををををををを作を
一車角言菊白御祈を泡振ふのををを二ををををををを
ををををををを
一朱粒言菊白御祈八年法の新ををををををををををををををををを
れをををを用ををを乗をれをををを
一菊一をを蓮泡をを御の後襲ををををを醫法越俗言
三節をいをつををををを

ををのをををををををの枕をを
年越俗言法をを白元人のをを百むけを白面の深を

[illegible]

[illegible]

一箱ハ[illegible]

[illegible]

一史邦[illegible]

[illegible]

[illegible]

上こいや下を武子はくらう背屋　史邦

[illegible]

[illegible]

一三ハの新妹と支考机陽と白雪問古事ハ

[illegible]

蘆[illegible]　[illegible]

敵所を武運の[illegible]　[illegible]

敵打の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一菊ん地子去て田一丈のうち菊迄の三反ゆるん人ハ祖者く
十日子ふ人ハ名人と
一詩ハ六歌の和及ら牛子ハ業といつるの書こ子と他ぎんと
を定もそれ

新人ハ菊子うける 祖代うれ

一詩ハ菊日茅屋一日のおハきあるうと又日茅屋一日ハ
えの的ようう叶のもし大方茅屋の日ハ人と言了

一詩ハ菊子ハ菊日茅屋一日のおハきあるうと又日茅屋一日ハ
えの的ようう叶のもし大方茅屋の日ハ人と言了

人ハ世ハ世ようと世ようん 机陳
嵐 舟 ハ 嵐 菊

子を世を遊ぶ人ようう世ハ
子ようきようし此度の一字ハ子ようるようう世ハ子念の
次半オし勅さうと大山のようとハ起ようて日ハ後の
一字ハ大ようけ作ようて更ようう滿足かきう明日くしのハ

次ようの嵐ハ舟きしるふと

しあようう対ようの子ようの子有て寄の子なるの紙一位
ようう次ようの嵐ようようハ寄ようと廻し位れようと一日ようの後ようる

と定めり中ら色次方の嵐とくるかまくれり白濁次方の
嵐と称しく定て行れも舟きしるきこの七文字後れ
ら上の七文字を尾州名古屋の一字ずつ名付る
ものの外とりさハ仏ようれしく面くれるんこれ浮とよ
くこれる人物出よういいかを八肝をつかさうの
みて喜悪の差別を明く射の腕千強さうとして千秋
けりしぐ対一寸のものとて千系産毒の死のうといくも
世ようしれ枝をるとよくんの性さと宮ひ付る
一能ふる考文言の所きり白人物手て文字を知むといかし
李白ゆるて

はふとうおを立けきとこの白千人しく文字外
子菊を名付て射手迷鮫舟やとこの文字ハ左まくく式白

門人ようしくめそ外式射ハ日ん地ゆる白千
主つむ山の松の角とこの白千文字を野ん鮫と費
しく蓬ものて下宮やとこの文字を作ると作ると作ると白し
五文字と作ると千容易とものと出きとしんいろ物ゆるく
しとくひとと見退て書ゆすくて鮫舟とこの文字八五人さ
物ゆるて下宮とこの文字ようん俗の菊の画絵を作るとこの
一性逃ふ所の射菊ドされ八懐千前さ入をくるる白八外とし
射ようとうその宮のなれ八一角ようこの文字ようゆるくくひ人合ようし
ゆるくくるとて
一性無名鮫八ふ白のかとゆるんや又風鮫とこの風鮫なるあ
きひくくしやるるの作ると菊四ようこの白の姿ようくくくく
いくくの白ふ鮫しく作ふくくくくくきる者しくされ八風鮫八

[illegible]

一去年もかうしやうの[illegible]人来りて誠をもとめて
[illegible]

先達てかまくらに代くくの[illegible]時俳諧の誠を待つ
て大きさの[illegible]人の脇を待つ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 為日本の物ハ全く俳諧にて
さくのしれるものの俳諧ハ何も俳諧
俳諧を尺牘に入れ
なるべきものと費日をとりけく一そのとく書
何とも俳諧にて費日をとりけく一そのとく書
俳諧にしてもんを有千分代日の教化を
和一篇よりおもしろくしたる
一 去芳を俳諧ハ上三の和ハ俳諧にて
を俳諧にて俳諧ハ
も俳諧に費する物の
と見又ものもむ堤を
てそなりけるかの

尺牘にて俳諧ハ
ふし俳諧の式の
書ものハ式
浮園の代三を一
散りるものハ俳諧
俳諧ハ事を
りて見を大
合の書千分千書
と言ふ千本
合のものを
きこのしをハ
ものをし

尺牘にやはり別俳諧の誠
式より俳諧の
追加しを
三源良基按
今宮の一條
ハ青柏の代
七日をの
ハ五日
今葉の追加
和の
俳諧にて
書千分千書
廿年を
ハ俳諧
ものを
ハ俳諧
ハ千

しかるに八文字屋の作れる代々はかなり世俗に用ひられ人の有
るやはたかしら形式をしるされらへるつきあひしる合の
その八代集ようよう〳〵文八大りさ　但寸法ハ〳〵所業
ものうつしとて信用して古今のひそうの家門のはたもあさ
ハたすくしよと宣へり
一　古今集のてに紙四〳〵に箔四枚ずつ用ひさしこ寸
のうへ巻の初めて巻て集めて至手紙をつて巻目ものの表
紙ばかりおきまして今世のあるて表ふしてものみ家物家物の作
巻ふしてものみ家物家物の作者の作者の作者の作者
ものじに世俗わしの門人ども作者の作者の作者の作者
ものしし又或対四方の四巻ものの作者の作者の作者
必巻のものとはて表のものに巻ものの作者の作者

のみしつかりて巻ものの作者の作者の作者の作者
ものしかるに巻ものの作者の作者の作者の作者
一　松のその俳書ものの箔四巻ものの家巻ものの作者
ものしかるに巻ものの作者の作者の作者の作者
おのれ今松巻能ものの巻ものの作者の作者の作者
四巻ものの作者の作者の作者の作者の作者の作者
松の作者の作者の作者の作者の作者の作者の作者
一　箔四巻ものの作者の作者の作者の作者の作者
箔四巻ものの作者の作者の作者の作者の作者
一　つふしかるに八代集ハ古今後撰拾遺後拾遺金葉詞花千載
新古今これ後古今門後撰拾遺後拾遺金葉詞花千載
代集ものの作者の作者の作者の作者の作者の作者

集ゝ[illegible]たゝ[illegible]集ゝ[illegible]今の[illegible]れゝ[illegible]他[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]

一 [illegible]田[illegible]の白ゝ[illegible]大[illegible]白[illegible]新[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ものゝ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
白を引[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ふゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ

[illegible]

一 文章の事 冒頭を文章と云 序と由序 来序 内序と云
三段に分る 由は起る事を来は起る元の事を 内は本末
共内の事を云 但三段を一二に分て序一つに成 跋は序と
同事有 跋は序と同し 跋は序を新
[illegible]

代の詞 [illegible] 対は [illegible] 対は [illegible]
[illegible] 対は [illegible]
[illegible]
[illegible]
[

歌書の内を廻て他ていなる男女ハなうてさし戯角ハ若ふ
をかの人を教ゆきるえてなるの歌ハ用ひ事一百餘一五
五へうらいとし

一去芳吉の詞述懐の歌仮文にて云ふ白ハ書の内にて他ひと
ふ事ふ好菊白ものうくしてしかしやハうてふ仮文にて
ふくく人の上ニ云ハ物しを述懐しを物の歌ハ若し
ふくてつまし弱ものさうりふくなくて全くの貧家を約
すの白ハ月花すへて代人の白ハとのいやしとし

一去芳吉吉ものうくおきしかしを古事を仮文にて書て
物つくしに又代の物の上にかの白の歌いう
作ふんと思しを菊白大ふ白ハ書ときしの物ふ事ふ
てふれふいつまとふくとふ物ひし白をもふ白のとし

きふ物ふをも物ふふハ他書ハ清ふひきふれ一向ニ物ものを
いひふ方きふくしまれとふ表の他ふ物されハ若ふ若し
ふふ物ものとふふ物ふと宣く

一去芳吉今の人名おまてに物ものを作ふんと書ふ菊
白今の人の名ハ物ものを古人の名ハ物ものを若ふ
きれとふふふ物ひきふひなふとのれふ

一去芳吉詞述懐を仮文にて書ていふくしく書ふ物ふ物ふ書ふ
叶ハきふのうふむ心ハいふくふものをハ菊白ものハ知て大切れ
てし物ふふと述を用ふて新代よりの日本ハ書きの物し
述ふくてふ物ものをふし物むくしとし

一菊白ものハ新他ハ三十五物ものを一ものを物ひ書きふ
少の改ハ出ものくやなれハし

一菊日歳旬のうの八一すまたの涙なれハ細心ハ老を忘すくしハ雪ゆ物
ゝ[illegible]ゆ[illegible]ゆう白姿ゝ[illegible]ゆくゝ[illegible]ゆくゝ[illegible]ゆう
ゝ仕る去年を菊ハ恢弦の歳白かろもゝ[illegible]ゆ[illegible]
ゝくゝ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]又古来ゆう新米の舎ゝ樹ゝ[illegible]
大の哭遍悼ゝ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]斜船中ゝ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
ゆの歳長ゝ[illegible]心つゝ[illegible]ゆ五[illegible]不長ゆ哭一ゆゝ[illegible]合ゆ[illegible]
めゝゝ[illegible]歳旬のみゝかゝ[illegible]ゆ[illegible]

一菊日服八尊ゝのゝゝ。ゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
宮歳旬ゝゝ[illegible]ハ必宮ゝゝ[illegible]接拶ゆ一年歳旬ゝゝゝ服ゆ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ接拶ゝ仕ゝゝ服尊ゝの旬ゝゝ
ゝゝゝ[illegible]ゆ接拶ゝ重角ゝ[illegible]ゆゝゝゝゝゝ接拶ゝの心
ゝゝゝゝゝ歳旬三月ゝゝゝゝゝ宗物ゝゝゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]

をゝゝゝゝゝゝ[illegible]ハゝゝ[illegible]ゝの[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
一菊日歳旬ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一菊日第三大体もてさ持しさ長寿く菊のとく言
ゆ法外宗能よれ格式と考用き通りし物いの如字の歳白
れ時八第三大ものよ大体ひ物ひの白三白を加物
筑八ものもの白ものもし白中と押字者やういつ伝方の歌
又白ようて押字方くさものるゆ一中をもしをんちんの歌
なり伝菊の歳白の第三ようものを菊きたと言ようも法定
の伝方ものきたとし花のさうゆ白の変ひさううく
変ようもといを通ふしてに物ふして歳白
きぶ菊一文字白ものは白自無ゆ古法口伝ゆとし一
説古書ゆ物八昭の白物字菊り歳ゆ
ゆ菊ものし拙ものを人もし菊八第三文字もし菊ゆ物の
八達人ゆ物学の菊ものよ物毛以前の習し第三八物ゆ

ものを物ものもれものも服の白ものよ人ゆ達附方の白ゆ物
八方三ものし物ものう及ものもし歳白毛物被方物し服
ものれゆ立ものゆ第三ゆ物ゆ天毛を物ものものれて方一
ものの白八ものものもて物ものものものものものものものもの
菊白おものもの白ものの物ものゆ伝ものし白ゆ物ものもん
ものし古事ゆ物れものきぶ菊ものし東秋の季ものお四白のもの
花月の白ものものものものものものものものと言ものし
一第四ものの白ものもの七白の伝ものゆ古物ゆ七白の伝ものゆ
ものゆ第三の物一所上の白ものと歳ものゆ中ものゆ月ものゆ毛ものゆ
毛ものゆ物一同言ものを歳ものきものものものものものものものし
ものゆ菊八白の一伝ものを毛ものし第ものを八東ものを第ものし言流

[illegible]

一毎日毎月毎年[illegible]

一毎日月上の白[illegible]

[illegible]

一毎日毎月二つ[illegible]

月[illegible]花の[illegible]

[illegible]

一五月[illegible]

[illegible]

[illegible]

一菊白雪一所のうつし植のてふ
[illegible]

一菊白梅白仕立ること古流ハ今一白の朱を一ぱ無さんこれも又[illegible]筆[illegible]ぱ[illegible]ぱ[illegible]の白ハ梅白を第さ[illegible]ぱ白を[illegible]ぱ[illegible]の白の花を[illegible]を[illegible]ぱ[illegible]梅白の香を[illegible]ぱ[illegible]白ハ[illegible]

一菊世話の桃と門人の[illegible]と同じ白の[illegible]にもさ百変百化す[illegible]ぱ[illegible]の三[illegible]れ[illegible]三[illegible]ぱ[illegible]

[illegible]

[illegible]

一菊白俄仕立ハ[illegible]三合八勺[illegible]七合八勺[illegible]

一桃先を[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

きのふ[illegible]

みくしゐ[illegible]白　白の　彩　京未

京菊の芳を新美しものひ[illegible]

是米五合[illegible]

[illegible]

[illegible]